

志賀直哉年譜考(十一)

——明治四十年一月から六月まで——

生 井 知 子

明治四十年(一九〇七) (数え二十五歳・満二十三歳〜二十四歳)

1・1(火) 午前一時頃、直哉は岩元禎と別れ、帰宅。ツルゲーネフの『Rudin』を読んで寝る。午前、墓参。午後、「美学」の

ノートを写す。夜、小山内薫の『病友』(M40・1「新小説」)を読む。(日記)

1・2(水) 直哉は午前中はドイツ語を勉強、牛込の叔父・高橋豊夫と話す。夜、夏目漱石『鶉籠』と鳥崎藤村『緑葉集』を買い、

玉の井亭に行く。ひどい下痢をする。(日記)

手帳に『祖父を失った祖母は実にmarriedになった、女は年を老ひても夫なしに存立する事がそれ程六けしいものかなあー』、『己が自由意志を金の為に売らずに過した生涯を以つて小なる成功の生涯といふを是とする』と記す。

(手帳6「補⑤P142〜143)

1・3(木) 直哉は、午前、夏目漱石の『野分』を読む。夜、登張竹風の『島の聖』(M40・1「新小説」)、ツルゲーネフを読む。

(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布二月七日の消印。年末、パリに到着したとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

1・4（金）直哉は、午前、「美学」のノートを終わりまで写す。「Rudin」を読み、この小説には同情を引く人物は殆どいないと思う。小栗風葉『わかれ際』（M40・1「新小説」）を読み、国木田独歩の『恋を恋する人』に似たところがあると思う。（日記）

ヒルテイの社会主義観に大いに感服と手帳に記す。ツルゲーネフをこれから少し読もうと作品名をリストアップする。（手帳6）補⑤P143～144

*『稲村雑談』『読書』・『愛読書回顧』によれば、英訳の『ルージン』を読んで、主人公を大変面白いと思ったといふ。

1・5（土）直哉は「Rudin」を読む。（日記）

1・6（日）午前、直哉は「Rudin」を読了。武者小路実篤が三十九度以上の熱を出しているというので、朝、見舞いに行く。午前、内村鑑三の話聞き、手帳に記す。正午、木下利玄を訪問。一緒に出かけ、直哉だけ牛込の宝泉寺に法事の相談に寄り、正親町公和の家で待合わせて、三人で愉快に雑談する。夜は木下利玄と二人で両国二洲亭に朝重を聞きに行くつもりだったがやめ、七時頃三人で中西へ行くが早仕舞いをしていて戸を叩いても開けない。小川亭の前まで行く人が多そうなのでやめ、川竹に木下利玄と二人で入って円蔵や金馬など三、四聞く。幸田露伴『天うつ浪』、木下尚江『懺悔』を買う。（日記）（木下利玄日記）（手帳6）補⑤P145～146

1・7（月）朝、直哉は「Rudin」の序文を読む。午後、直哉は木下利玄と新富座で観劇。「つや物語」、喜劇「写真」を見る。伊井蓉峰、河合武雄など。小山内薫に会う。（日記）（木下利玄日記）（続々歌舞伎年代記）坤の巻

武者小路実篤が直哉にお礼の葉書を書く。昨日、高熱の中、夏目漱石の『野分』を読了した、痛快だ、など。（『武者小路実篤全集』）

1・8（火）直哉は夜、木下尚江の『懺悔』を読了。（日記）

手帳に《かやうな所に長居は恐れ。》という会話を記す。三十七年夏のものを書したか? (「手帳6」補⑤P146~147) ↓
未定稿69『せめふさげ』(九)

1・9(水)

朝、直哉は鏡花の『縁結び』(M40・1「新小説」)を読む。夜、ツルゲーネフ『Smoke』(『煙』)、小山内八千代『葡萄酒』(M40・1「新小説」)を読み、感想を手帳に記す。(日記) (「手帳6」補⑤P147~148)

番町の叔母・吉田せいが、志賀家に來宅。ゆきの一寸も短い着物を着てきて、縫い直すのが面倒だから手に上げをして着ていると言う。(「手帳6」補⑤P148~149) ↓後の未定稿69『せめふさげ』(八)、『暗夜行路』(第一一五)の愛子の母のモデル

手帳に《自家の人には自分の考へなどは一切話すまい。(中略) 彼等は青書生はいつまでも青書生でゐて赤書生となるものだとは思つてゐないから馬鹿だ、(中略) 両方で余り快くない思ひをする原因は何所にあるかといへば、第一、智識のケンカク、第二、思想の新旧、第三、家庭の物質的組立の不完、等であらう》と記す。(「手帳6」補⑤P149)

1・10(木)

午後、木下利玄・細川護立が志賀家に來宅。直哉は、夜、木下利玄と話す。寝付きに福地桜痴原作『みだれ焼』を読む。サンドウの運動を始める。白犬が来る。(日記)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。インフルエンザだ、木下尚江の『懺悔』は三日に読んだ、とのこと。(「武者小路実篤全集」) (「志賀直哉宛書簡」)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。(「志賀直哉宛書簡集」)

1・11(金)

午前、米津政賢が志賀家に來宅。夜、直哉は小川亭に一人で行く。若の助の「玉藻前曦袂」三段目が面白くと思ひ、昇之助の「壺坂靈驗記」に感心する。Rudinの第二章を読む。熊川の伯父・半谷重固が來宅。(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。(「志賀直哉宛書簡集」)

1・12(土)

直哉は、関安子から手紙を受け取ったので、黒木三次と相談し、有島武郎が帰朝の上、万事を定める事にする。(日

記

正親町公和が直哉に絵葉書を書く。近いうちに書いたものを何か見せるつもり、『懺悔』も読んだが、取り立てて言うほどのこともないと思ったなど。(『志賀直哉宛書簡』)

1・13(日)

午前九時半より、志賀直道・銀・直員の法事。直哉は、帰りに武者小路実篤のところへ寄り、墓参。『みだれ焼』を読む。(日記)

1・14(月)

直哉は風邪を引いたようで、午後ちよつと東京座まで行って、帰り、中井常次郎に診て貰う。(日記)

1・15(火)

*東京座では、一月一日から、ジャグラー操一らによる大奇術が公演されていた。(M40・1・12『読売新聞』)

1・16(水)

直哉はインフルエンザにかかる。(日記)

1・16(水)

午後、武者小路実篤が志賀家に来宅。(日記)

直哉は、十一日に昇之助の「壺坂靈験記」を聞いて、その身振りについて考えたことを手帳に記す。近江央、大津央というペンネームでの文壇デビューを考える。(手帳6「補⑤P150~151」)

木下利玄が直哉に『通夜物語』の自筆絵葉書を書く。昇之助の「壺坂靈験記」を聞いて感心したと聞いた、など。

(『志賀直哉宛書簡』)

1・17(木)

夜、直哉はフォアガッツロー「The Saint」(『聖徒』)を読む。『鳥の声』を作りかけるが、出来ず。(日記)↓未定稿23、

24『鳥の声』、後の未定稿39『山の水車』

*座談会『志賀直哉日記をめぐって』の直哉の発言によると、『鳥の声』は、三浦環がモデル。音楽会に行つて三浦環のことは割に好きになっていた。山の水車小屋で鳥が啼くのが音楽会で聞いた唄に聞こえてくるというような幻想的な話。

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ十八日の消印、麻布二月二十二日の消印。今朝、有島武郎がロンドンに行つた

ので一人になったとのこと。〔志賀直哉宛書簡集〕

1・18(金) 午後、正親町公和が志賀家に来宅。直哉は、十時頃まで話す。フォアガッツロー、Il Sarto、を少し読む。『愛子と徳

田 梗概』(日記ではまだ『お静と徳田』)の筋立てをする。(日記)(未定稿25) *山本愛子と増田英一がモデル。

1・19(土) 半谷重固が帰郷。直哉は、フォアガッツロー、Il Sarto、を読む。(日記)

1・20(日) 内村鑑三は風邪で休み。午後、直哉は岩元禎を訪問。十一時頃帰る。(日記)

1・21(月) 直哉は久し振りで登校。午後、岩倉道俱、武者小路実篤を訪問。夜、鏡花の『式部小路』を読む。(日記)

1・22(火) 直哉は大学まで歩く。一時間十分かかった。午後、木下利玄と上野を散歩し、坂下で別れ、東京座へ行く。夜、「美

学」のノートを写し、鏡花を読む。(日記)

*武者小路実篤『白樺を出すまで』『大学』によると、武者小路実篤は当時徒歩主義で、麹町から大学まで五十分歩いて通っていた。直哉も一時かぶれて、志賀家から武者小路家まで誘いに来て一緒に歩いて行ったことがある。しかし一月も続かなかったという。

1・23(水) 午前、直哉は「美学」のノートを写し、ドイツ語の勉強。午後、武者小路実篤との語学の勉強会。夜、木下利玄と小

川亭に行き、組広の「壺坂靈験記」壺坂寺の段、若の助の「本朝廿四孝」四段目(十種香)、昇之助の「傾城阿波の鳴

門」八段目などを聞く。「言語学」のノートを写す。(日記)

1・24(木) 直哉は朝「言語学」のノートを写し、午後ドイツ語を勉強。夜『式部小路』を読む。武者小路実篤を誘って歩いて登

校。(日記)

1・25(金) 午後四時頃より、直哉は武者小路実篤と岩元禎を訪問。十二時近くに帰る。(日記)

1・26(土) 朝、直哉は上田敏の「英語」に出て、帰り、黒木三次と服部他之助を訪問。服部の自宅での勉強会でミルトンを取り

上げると決まる。(日記)

- 1・27(日) 三河屋の牛肉を食べに行った帰り、直哉は里見弴を訪問。午後、共に銀座を散歩し、志賀家で十一時近くまで話す。里見弴が帰ってから明け方四時まで「文学概論」のノートを写す。(日記)
- 1・28(月) 直哉は、大学に登校。昼に本郷の青木堂で柳谷午郎に会い、近いうち、睦友会で遠足をしようという事になる。午後
の授業は休み、里見弴から借りた小山内八千代の『新緑』を読む。夜九時、黒木三次から電話で、明日から箱根に遠
足に行こうと言われ、承知する。(写真裏書込・新『志賀直哉全集』補④P21)(日記)
- 1・29(火) 直哉は午前、夏目漱石の「十八世紀文学」を聞き、昼に青木堂集合。川村弘・田村寛貞は急で行かれないので、
柳谷午郎・黒木三次と共に新橋に向かい、酒匂に山本愛子を訪問し、午後七時頃、塔の沢着。新玉の湯泊。夜、黒木
三次から『クオ・ヴァデイス』の話を書く。(写真裏書込・新『志賀直哉全集』補④P21)(日記)
- 1・30(水) 議論の末、直哉ら一行は小涌谷に行くことになる。途中、宮ノ下で写真撮影。午後九時二十分、新橋帰着。モメンタ
リズムの旅行だった。(写真裏書込・新『志賀直哉全集』補④P21)(日記)『現代日本文学アルバム 志賀直哉』掲載・写
真
- 1・31(木) 直哉は、午前、武者小路実篤を誘って登校。午後、里見弴へ『新緑』を返し、武者小路実篤の家に寄り『愛国心』を
聞く。夜、フォスを読む。《自分は所謂恋をする事は出来ぬ》と日記に記す。鏡花を読む。(日記)
- 乃木稀典が学習院長に就任。(『学習院史』)
- 2・? 里見弴らの詢友会の回覧雑誌最終号「古甕」が発行される。(M40・2「古甕」)
- 2・1(金) 午後、直哉は歌舞伎座で「女暫」を観劇。芝翫、羽左衛門など。丸善でツルゲーネフを七冊買う。夜、琴平亭で東猿
の「絵本太功記」十段目を書く。東猿を尊敬する。鏡花の「式部小路」読了。(日記)『続々歌舞伎年代記 坤の巻』
- 2・2(土) 直哉は黒木三次と、病気の内村鑑三を見舞うが、内村鑑三は祐之とたこあげをしている。服部他之助の所では、ミル
トンが始まる。帰り、柳宗悦と話し、夜柳が志賀家に来宅。十二時過ぎ帰る。(日記)

2・3(日) 夜、直哉は志賀英子を連れて、琴平亭に行き、東猿の「伽羅先代萩」六段目(御殿)を聞く。(日記)

2・4(月) 夜、直哉は図書館に残り、帰途、東猿の「壺坂靈験記」を聞く。(日記)

志賀直温、豊前採炭株式会社監査役に就任。(志賀家系図)

2・5(火) 直哉は、ゴリキキーの翻訳『無法者』と斎藤信策「イブセンの『第三王国』」を読む。三時頃から短篇を書きかける。(日記)

2・6(水) 午後、直哉は武者小路実篤と独訳のモーパッサンを読む。夜、一人で東猿の「艶容女舞衣」酒屋の段を聞く。帰って「言語学」のノートを写す。(日記)

手帳に《恋を理想的に考へて、それに対し自由な考へを持つて居て、しかも恋する勇気がなく、避けつゝ、求めてゐるのは現代の青年ではあるまいか》と記す。(手帳6)補⑤P153)

2・7(木) 直哉は、有鳥生馬に長い手紙を書く。(日記)

2・8(金) 夜、直哉はモーパッサンの「Orphan」(孤児)を読む。(日記)

直哉は、川村弘が図書館で借りた「猿曳門出諷」を読む。(手帳6)補⑤P154~155)

2・9(土) 直哉は上田敏の「英語」を休む。午後、九段中坂下の教会における芸苑社主催の講演会で、上田敏の「旧約聖書の文学上価値」や島崎藤村の「種播く人」という演説などを聞く。藤村は、種まく人すなわち先駆者が、その手段として金を欲し、それを得るために全生涯を費やして最初の目的はなさないで終わる愚を話し、空想のみで何事も実現できない者を排し、ツルゲーネフの所謂実際の理想派の人たれ、と結んだ。非常に下手だが、感じの深い演説だった。有鳥生馬宛の葉書に、この演説会のことを書く。(日記)(M40・2・9有鳥生馬宛書簡)(座談会「志賀直哉日記をめくって」)

(演説の印象)(M40・2・17「読売新聞」)

2・10(日) 午前、武者小路実篤が志賀家に来宅。午後、直哉は一緒に丸善に行き、イブセンの「Brand」とメーテルリンクを買

う。(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ロンドン十一日の消印、東京三月二十四日の消印。(志賀直哉宛書簡集)

2・11(月)

前夜、直哉は森田明次が生きていたという夢を見る。直哉は、有島生馬が出発前にくれた手紙を読み、そのことを有島生馬への手紙に書く。関安子は今本郷五丁目に住んでいるなどと付け加える。(日記)(M40・2・11有島生馬宛書簡)

2・12(火)

直哉は島崎藤村を訪問しようかと大いに迷ったがやめ、夜、玉の井亭で円蔵を聞き感服。(日記)

この頃

直哉は、近江直也という名を考える。(手帳6「補⑤P10」)

2・13(水)

朝、直哉はメーテルリンクの『Modern Drama』(近代の戯曲)を読む。午後、武者小路実篤とドイツ語で、モーパッサンの『Wolf』(『狼』)を読む。夜、木下利玄と新声館に行く。小土佐の『三日太平記』九段目(嘉平治内)、素行の『伊賀越道中双六』六段目(沼津)、素正の『三十三間堂棟由来』(柳、朝重の『本朝廿四孝』四段目(十種香)などを聞く。帰ってから野上八重子の『縁』、寒川鼠骨『散歩』を読む。(日記)

2・14(木)

志賀直温、熊沢に出発。直哉は朝、武者小路実篤を誘う。演伎座で『傾城反魂香』を見る。時蔵など。夜、琴平亭に行き、東猿の『恋飛脚大和往来』(新口村)などを聞く。大塚楠緒子の『あきらめ』を読む。(日記)(続々歌舞伎年代記「坤の巻」)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。ロンドン十五日の消印。(志賀直哉宛書簡集)

2・15(金)

夜、柳宗悦が志賀家に来宅。(日記)

2・16(土)

午前、直哉は上田敏の『英語』を聞く。夜、宮松亭で東猿の『絵本太功記』十段目を聞く。モーパッサンの『Cale』(『菓子』)を読む。(日記)

この頃

手帳に、直哉は『好きな人は三人ある』として島崎藤村、東猿、馬楽を挙げる。(手帳6「補⑤P16」)

2・17(日)

午後、直哉は、志賀直方を新橋に迎える。常盤木倶楽部の落語研究会で馬楽を聞く。(日記)

- 2・18(月) 朝、直哉は高浜虚子の家に寄って『坊ちやん』を買い、正親町公和を誘って登校。夏目漱石は休講。午後、『坊ちやん』を贈ろうと馬楽の家を探したが見あたらず、宮戸座で「猿廻首途諷」を立ち見する。本郷の青木堂で岩元禎に会い、「文学概論」を済ませた後、行く。十一時半まで話す。(日記)『続々歌舞伎年代記』坤の巻(「手帳6」補⑤P161~162)
- 2・19(火) 朝、志賀直方が熊沢へ出発。午後、直哉は風邪で寝ている武者小路実篤を訪問。夜、東猿の「壺坂靈験記」を聞く。(日記)
- 2・20(水) 直哉は、午後登校。帰途里見弴を訪問し、十一時半まで話す。(日記)
有島生馬が直哉に絵葉書を二枚書く。アミアンの消印。麻布三月十五日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 2・21(木) 夜、佐藤たかが木村家に来たので、直哉も行く。(日記)
- 2・22(金) 直哉は朝から頭痛、風邪気味。午後、里見弴と柳宗悦が志賀家に来宅。柳はすぐ帰り、里見弴と十一時まで話す。(日記)
- 2・23(土) 午後、服部他之助の家の会。志賀直温・直方帰宅。(日記)
- 2・24(日) 午前、直哉は里見弴と深川見物。午後、人形町で、天ぶらを食べる。ゆすりをする男を目撃。東猿の「仮名手本忠臣蔵」四段目を聞く。(日記)〔座談会『志賀直哉日記をめぐって』〕
- 2・25(月) 直哉は気分が優れず、「文学概論」は出ずに帰宅。(日記)
直哉は、有島武郎の帰朝までは辛抱しろと関安子を慰めてきたが、なぜ武郎にすっかり話さなかったのかと責める書簡を有島生馬に送る。(M40・2・25有島生馬宛書簡)
- 2・26(火) 直哉は前日の「文学概論」のノートを写す。(日記)
- 2・27(水) 午後、直哉は武者小路実篤との語学の勉強会。夜、西沢勇志智の送別会。(日記)
- 2・28(木) 夏目漱石の「Merchant of Venice」の講義が終わった。午後、猪原(貞雄、M39・11・13志賀直哉宛有島武郎葉書)が志賀

家に来て、スイスの話をしてくれる。(日記)

この頃か? 直哉は、大津史著『鶏の声』(↓未定稿26)、近江史著『鳥の声』(↓未定稿23、24、後の未定稿39『山の水車』)の単行本の

表紙を考える。(「手帳6」補⑤P163~164)

3・1(金) 直哉はお雛様を飾る。川村孜が来るはずだったが来ず、柳宗悦が来て八時近くまで話す。立花亭に東猿の「絵本太功

記」十段目を聞きに行く。木下利玄も来ていた。(日記)

3・2(土) 直哉は登校するが授業は休んで、午後、岩倉道俱を訪問。服部他之助の会。夜、宮松亭で播玉の「勢州阿漕浦」平治

の段、文字之助の「日吉丸稚桜」三段目、長広の「艷容女舞衣」酒屋の段を聞く。木原店で小さんの落語を聞く。

(日記)

3・3(日) 直哉は久し振りに内村鑑三の話を聞く。帰り、輔仁会大会に行く。新渡戸稲造の演説を聞いて不愉快に思う。新渡戸

の演説後、学習院院長の乃木希典大将が壇上に乗って握手し大喝采。(日記)(M40・3・15有島生馬宛書簡)(草稿「第三

篇」一)

3・4(月) 午後、直哉は「文学概論」は休み、武者小路実篤と丸善に行つて帰宅。夜、喜吉亭に行く。(日記)

3・5(火) 直哉は、夜、喜吉亭に行つて、帰りに馬楽に『坊ちゃん』を贈る。(日記)(座談会『志賀直哉日記をめぐって』)

3・6(水) 午後、直哉は真鍋家で武者小路実篤との語学の勉強会。ドイツの英雄伝を見る。大塚保治の「美学」は休み、帰途、

武者小路実篤の家に寄る。(日記)

3・7(木) 朝、直哉は武者小路実篤を誘つて登校。(日記)

3・8(金) 午前、木下利玄が志賀家に來宅。午後、歌舞伎座で、直哉は木下利玄・細川護立・川村弘と観劇。「宮島だんまり」

「高時」「妹背山婦女庭訓」「大成功」「寿うつば猿」を見る。十一時帰宅。(日記)(続々歌舞伎年代記)坤の巻

3・9(土) 直哉は、志賀留女・浩・妹たちと、午前八時半両国発、午後二時近く銚子着の旅行。モーパッサンの「The Pedlar」

〔「商人」〕を読む。(日記)

3・10(日) 一行は、午前燈台の下まで行き、午後帰宅。直哉は、モーパッサンの『Mother and Son』(『母親』)を読む。(日記)

3・11(月) 直哉は風邪のため、「文学概論」をやめて黒木三次・木下利玄と帰宅。途中、自転車に乗った人を馬鹿と言ったら怒って一騒動。(日記)(M40・3・22有島生馬宛書簡)↓後の未定稿133

3・12(火) 午後、直哉はドイツ語を勉強し、ゴリキエを読む。この頃、むやみと仕事を邪魔する小悪魔の存在を感じる。(日記)(M40・3・15有島生馬宛書簡)

3・13(水) 直哉は風邪で頭痛。午後、武者小路実篤と語学の勉強会。夜、島村抱月訳の『其の女』を読む。(日記)

3・14(木) 夏目漱石は休講。帰途、直哉は教文館でピュヴィ・ド・シャバンヌの画集を買う。夜、『Brand』第一幕を読む。(日記)

3・15(金) 午後、柳に武者小路実篤が志賀家に來宅。絵を見て、直哉は、うれしくてたまらず、聖書を読み出し、「ヨハネ伝」を研究する。(日記)

直哉は、有島生馬に手紙を送る。大変絵に興味を持つようになった、シャバンヌの本を昨日買った、杉山得一が韓国から帰国した、など。(M40・3・15有島生馬宛書簡)

3・16(土) 午前、直哉は大学を休み、『Brand』第二幕を読む。午後、服部他之助の会。夜、三河屋で杉山得一の歓迎会。柳谷

一郎の家に寄り、十一時まで話す。(日記)

正親町公和が直哉に絵葉書を書く。「国文」の試験は受けてみるつもり、作品ははかどったので遠からず見せられるとのこと。(『志賀直哉宛書簡集』)

3・17(日) 直哉は、内村鑑三の話聞く。午後、木下利玄の所に寄る。(日記)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。絵の趣味を感じるようになったのは直哉の影響だとのこと。(『武者小路実篤全集』)

- 3・18(月) 直哉は大学を休み、中井常次郎の所に行く。一種のインフルエンザとのこと。教文館に寄り、ナシヨナル・ギャラリーの画集を買う。武者小路実篤を訪問、夕方、里見弴の家に寄り帰る。(日記)
- 里見弴が直哉に絵葉書を書く。十九日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 3・19(火) 直哉は十時に登校。午後、丸善で、バックリン、ホーフマン、トルヴァルセンの画集を買う。学習院で『光琳派画集』と『近世絵画史』を借りる。夜、ドイツ語とゴリキーを見る。(日記)
- 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布四月十二日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 3・20(水) 午後、直哉は、武者小路実篤と語学の勉強会。ゴリキーの“Waiting for the ferry” (『渡し船を待つ』) も終わる。「美学」もこの学期終わり。正親町公和から新作を受け取り、三分の二ほど読む。(日記)
- 里見弴が直哉に絵葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 3・21(木) 朝、直哉は正親町公和の小説の残りを読む。武者小路実篤を誘って登校。この日、まずこの学期は終わり。帰りに川村弘・川村孜と東京勸業博覧会の美術館を見る。(日記)
- 3・22(金) 午前、直哉は、有島生馬に手紙を書く。田村寛貞のことなど。午後、日本橋の落語研究会に行く。帰途、丸善で、セガントイーニ、フォイエルバッハの画集を買う。(日記)(M40・3・22有島生馬宛書簡)
- 3・23(土) 直哉は午後、服部他之助の所に行ったが休みで、松平茂時の部屋で四時まで話す。夜、ドイツ語の勉強をする。(日記)
- 木下利玄が直哉に絵葉書を書く。二十四日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)
- 3・24(日) 午前、直哉は内村鑑三の話を聞く。午後、武者小路実篤と正親町公和が志賀家に来宅、十時まで話す。小説を書いて集まる約束をする。(日記)↓十四日会
- 3・25(月) 午後から翌朝三時まで、直哉はドイツ語の勉強をする。(日記)

3・26(火) 直哉は午後、学習院へ『光琳派画集』を返しに行き、夜十二時までドイツ語の勉強。シラーに関する記事が面白いと思う。(日記)

3・27(水) 午後、直哉はフォスの“Goethe und Schiller in Brieien”を読み、夕方から岩元禎を訪問。岩元は強い人だから圧倒を感じると思う。十二時帰宅。(日記)

木下利玄が直哉に葉書を書く。二十八日の消印。語学試験の結果はまだ分からぬのだろうと思う、武者小路実篤は「ドイツ語」の二次試験は通過し、二度目が今日ある、夏目漱石が大学をやめ朝日新聞に入社したというのは本当か、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

*座談会『志賀直哉日記をめぐって』によれば、岩元禎は、“Goethe und Schiller in Brieien”を読めときりに勧め、読んだというと、話の中でそれとなく試験をした。直哉がドイツ語で読んだのは、ワイルドの『サロメ』の独訳とこれだけ。

3・28(木) 直哉は、丸善でシュトゥックの画集を買う。武者小路実篤を訪問。木下利玄・北島貴孝も来合わせる。夜、『鳥の声』を書きかけたが出来ない。(日記) (木下利玄日記)

3・29(金) 武者小路実篤が直哉に手紙を書く。昨日、『善人の苦痛』という小説を書き終えた、毎月一度ずつ難産すれば、そのうちに楽になると思うなど。(『武者小路実篤全集』)

3・30(土) 午前、直哉は、志賀英子と中井常次郎の所に行き、診察を受ける。直哉は気管支カタル。(日記)

3・31(日) 午前、直哉は内村鑑三の話聞く。体調が悪い。午後、武者小路実篤が志賀家に来宅。『新次』の話をする。(日記)

4・1(月) 夕方から、柳宗悦が志賀家に来宅。直哉は夜、“Goethe und Schiller in Brieien”を読む。(日記)

4・2(火) 直哉は“Goethe und Schiller in Brieien”読了。シラーに關した所だけ面白いと思う。(日記)

4・3(水) 午後、直哉は志賀英子と千人画伯展覧会に行く。新富座で観劇。「堀川波の鼓」「滝の白糸」を見る。伊井蓉峰、河合

武雄など。(日記)〔続々歌舞伎年代記〕坤の巻)

4・4(木) 直哉は午前暮参。午後、武者小路実篤・正親町公和と千人画伯展覧会に行く。演伎座で「沼津の平作」を立ち見。時

蔵が大変良かった。『お為と由夫』落想。(日記)↓未定稿28『お為と由夫』

4・5(金) 直哉は「甚吉」の清書をする。夜、朝重の「伽羅先代萩」六段目(御殿)を聞く。(日記)(未定稿27)

武者小路実篤が汽車の中から直哉に葉書を書く。(『武者小路実篤全集』)

木下利玄が直哉に葉書を書く。語学試験は「漢文」・「国文」ともに通ったとのこと。(志賀直哉宛書簡集)

4・6(土) 午前、直哉はモーパッサンの「The Blind man」(盲人)を訳す。佐藤紅緑の「人と犬」など「中央公論」四月号に

載った小説を読む。夜、朝重の「近頃河原達引」堀川の段を聞く。(日記)

4・7(日) 午前、直哉は『お為と由夫』を執筆。夕方、佐久間忠雄が来る。十二時頃帰る。(日記)

直哉は佐久間忠雄と連名で、有島生馬に葉書を送る。有島武郎はもう両三日の内帰朝だろう、「中央公論」を送った、

ゴリキキーのは、先に話した『二十六人と一人』の翻訳だとのこと。(M40・4・7有島生馬宛書簡)

4・8(月) 午前から取りかかり、午後四時、直哉は『お為と由夫』脱稿。(日記)(未定稿28)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。文楽座に行き、撰津大掾の義太夫を聞き、紋十郎の人形を見たとのこと。(『武者

小路実篤全集』)

木下利玄が箱根から直哉に葉書を書く。(『志賀直哉宛書簡』)

4・9(火) 直哉は気が進まないながらも鹿野山に行く。(日記)

直哉は、有島生馬に、鹿野山のことを述べ、有島武郎にロンドンで関安子の事を相談したのだろうと確認する書簡を

送る。(M40・4・9有島生馬宛書簡)

4・10(水) 直哉はバーン・ジョーンズの画集を見たが、さびしくて翌日帰ることにする。(日記)

4・11(木) 直哉は八時に鹿野山を出発、大風の中帰宅。夜、白杉義雄が来ていて十時半まで話す。志賀直方も帰っていて一時過ぎまで話す。(日記)

木下利玄が直哉に葉書を書く。昨日帰京した、「心理学」のノートは取りに来なかったね、広勝は北海道に巡業に出たそうだ、など。(『志賀直哉宛書簡』)

4・12(金) 午後、直哉は内村鑑三を見舞う。丸善でクリンガーを買う。(日記)

4・13(土) 直哉は志賀直方と東京勸業博覧会に行く。有島生馬から長い手紙を受け取る。(日記)

正親町公和が直哉に絵葉書を書く。いよいよ明日となったが、まだ何も出来ない、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

4・14(日) 志賀家で、直哉・武者小路実篤・正親町公和・木下利玄が自作の小説を持ち寄り、批評しあう。十四日会の第一回。

木下利玄の『お京』(『沈丁花』という題だったか? M40・4・16木下利玄日記)は評判が良かったが、あとは駄目だった。

(日記)武者小路実篤『或る男』百五(武者小路実篤『白樺を出すまで』「十四日会」)

4・15(月) 午後、十三日に亡くなった内村鑑三の父・内村宜之の葬儀に、直哉も行く。(日記)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。昨日の会で、自分たちが如何になっていないかがわかったとのこと。(『武者小路実篤全集』(『志賀直哉宛書簡』)

4・16(火) 直哉は、エマーソンとイブセンを読む。(日記)

4・17(水) 午後、直哉は武者小路実篤と真鍋家でベックリンを読む。「美学」に出て、木下利玄と木原店の昇之助の「絵本太郎記」十段目を聞く。帰宅後、木下利玄の作品と高浜虚子の『風流懺法』を読む。(日記)(木下利玄日記)

*『愛読書回顧』によれば、高浜虚子の初期の小説を愛読した、情緒的な所が好きだったという。

夜、志賀直方と木村峯との結婚式が八百勘で催される。直哉は、雛妓も人間で子供で無邪気だ、小説に書くと思う。(日記)

4・18(木) 夜、志賀直方と木村峯との結婚式が八百勘で催される。直哉は、雛妓も人間で子供で無邪気だ、小説に書くと思う。(日記)

木下利玄が、『お為と由夫』を読む。（木下利玄日記）

4・20（土） 朝、直方夫妻は鎌倉に新世帯を持つべく出発。午後、直哉は、東京美術学校で夏目漱石の話と上田敏の話聞く。

（日記）

この頃、『大小小紋』を落想。（手帳7）補⑤P168～170）

*座談会『志賀直哉日記をめぐって』の直哉の発言によると、『大小小紋』は〇〇の母親が志賀銀の形見分けの大小小紋を着て……ということだったろうと思うとのこと。

4・21（日） 直哉は内村鑑三の話を書く。木下利玄の家に寄る。（日記）

4・22（月） 午後、直哉は「文学概論」に出て、帰り、東京座に救世軍のブース大将の伝道演説を聞くが、下らない。木下利玄も誘うが、切符は売り切れだった。（日記）（木下利玄日記）（M40・4・23「読売新聞」）

*『わが生活信条』『演説の印象』によると、ブースの話は、気の抜けたつまらない話で大いに失望したが、後から考えると、話し上手のモットよりよかった。

4・23（火） 午後、直哉は黒木三次・松平春光と歌舞伎座で観劇。「春日局」「勸進帳」「新版歌祭文」「春色二人道成寺」。芝翫、八百蔵、羽左衛門、高麗蔵、菊五郎、訥升など。（日記）（『続々歌舞伎年代記』坤の巻）

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。（『武者小路実篤全集』）（『志賀直哉宛書簡』）

4・24（水） 直哉は大学を休み、真鍋家での語学の勉強会も休みにする。（日記）

4・25（木） 午後、直哉は武者小路実篤の所に行き、「言語学」を休んで、有島家を訪問。有島生馬の絵を見、有島武郎と色々話す。シャバンス、ベックリン、イプセン、メーテルリンクのことなど。黒木三次・田村寛貞も一緒。十二時頃帰宅。

（日記）（里見弴『君と私』十三）

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。祖母（武者小路管子）が亡くなったとのこと。（『武者小路実篤全集』）（『志賀直哉宛書簡』）

簡)

4・26(金) 七時十分の汽車で、直哉は志賀留女・淑子連れて、鎌倉の志賀直方の家に行く。(日記)

木下利玄が『万霊塔』起草。(木下利玄日記)

4・27(土) 直哉は上田敏の「英語」を休む。午後、服部他之助の所に行くが、休みだった。(日記)

志賀直温、東京堅鉄製作所創立総会において監査役に選任される。(志賀家系図)

4・28(日) 直哉は内村鑑三の話聞く。夜、木原店で昇之助の「近頃河原達引」堀川の段を聞く。(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印。(志賀直哉宛書簡集)

4・29(月) 午前、直哉は、「大小小紋」を少し書く。午後、「文学概論」に出て、往復に有島武郎の旅行記を読む。“Brand”第

三幕を読了。(日記)

この年か? 4・30(火)

直哉は、母に月代してもらう淑子や隆子・祖母の様子を、英子の視点から描く。(未定稿29)

5・1(水) 「美学」が休講で、帰りに直哉は銀座を歩く。(日記)

5・2(木) 夜、直哉は服部他之助の家を訪問。(日記)

5・3(金) 午後、直哉は、武者小路実篤を誘って有島家に行き、十二時近くまで有島武郎の話聞く。(日記)

5・4(土) 直哉は午後、体格試験を受け、服部他之助を訪問。夜、武者小路実篤が志賀家に来宅。(日記)

5・5(日) 午前、直哉は内村鑑三の所に行く。「直線」という演説を構想。帰途、木下利玄の家に行き、晩、琴平亭で林の助の

「壺坂靈験記」を聞くが下らない。(日記)

5・6(月) 午前、直哉は木下利玄と鳥合会を見る。明治座で観劇。「里見八犬伝」「大蛇退治」「盟約誓十徳」を見る。右団次な

ど。(日記)(『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

5・7(火) 直哉は昼頃、鳥合会に行き、鏑木清方、山中古洞に絵を描いて貰う。『医師』という演説を構想する。(日記)

5・8(水) 直哉は、志賀留女と東京勲業博覧会を見物し、帰りに佐本家に寄る。(日記)

5・9(木) 午前、有島武郎が志賀家に来宅。午後、直哉は黒木三次などを訪問。(日記)

有島武郎が直哉に手紙を書く。志賀家辞去後、香蘭女学校に行き、閑家を訪ねたが安子は不在で、母と話したのと。〔志賀直哉宛書簡〕

5・10(金) 直哉は、『ダイナマイト』落想(↓後の未定稿43『小説 ダイナマイト』。「本所弁天窟本夫殺し」という新聞の三面記事

から思い付いたもの。(日記)〔未定稿67『今度の小説に就いて』)

5・11(土) 直哉は午前「心理学」を勉強し、午後昼寝。米津政賢が来て夜まで話す。志賀直方が志賀家に来宅、志賀英子・木村

ツルを連れて鎌倉に帰る。(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ十三日の消印、麻布六月十八日の消印。(志賀直哉宛書簡集)

5・12(日) 内村鑑三の所は休みだった。午後、直哉は落語研究会に行くが、下らなかった。小山内薫と会い、一緒に丸善に行き、

ハウプトマンの集を買う。この日、稲・プリンクラーから電話があった。(日記)〔天津順吉 第二二、三〕(草稿『第三

篇』九)

5・13(月) 午後、直哉は池之端を歩き、東京勲業博覧会の水族館を見る。「文学概論」は休み、岩元禎を訪問。岩元禎は人の個

人性を尊敬しない人だと思ふ。グザヴィエ・クラウスの“Dante”、ブルクハルトの“Kultur der Renaissance”、ヒルティの“Glück”を受け取る。(日記)〔手帳6〕補⑤P165、〔手帳7〕補⑤P203、204)

*座談会『志賀直哉日記をめぐる』で「性慾の地獄」(ノート14)補⑥P298、301)に関して《それはドレーといふダントの挿絵を描いた人がある、フランスのね、Danteだつたかな、その人のヴァーゼルとダントの地獄巡りの絵があるんだよ。男女がごちゃごちゃになつてるのを二人が立つて見てゐる……それが夢に出たんだよ。上方にボンヤとい

ふのがあるだらう。ボンヤの二階へ上つてみると、それが女ぢやないんだ。男同志、それも年寄りも一緒にごちや／＼になつてゐるんだ。敷いてある布団に立つた足の裏が温かつたりする。つまりさういふ地獄だと思ふ。それを割にはつきり夢で見てね、それを書いたんだ。元を糾せば挿絵はずつと前に見たものなんだ。岩元さんの所に行つてゐる時に、ダンテのものを勧められて、こんな厚い本を買つた事がある。たしかTransといふ人の著書だ。それに載つてゐた挿画なんだ。ポッティチェリーとドレーの挿画が沢山あるんだけど、そのドレーの方にさういふ挿絵があるんだ。』と発言している。座談会『志賀直哉縦横談』でも言及している。

「手帳7」(Impressions IX)を使い始める。(新『志賀直哉全集』補⑤P166)

5・14(火)

直哉は、午前、小山内薫を訪問。小山内薫から内村鑑三の許に通つてゐる色々な人の噂を聞き、世の中の人は皆、面を被つてゐるのだと不快に思う。『面』落想。(日記)〔手帳7〕補⑤P166～168(M40・6・8有島生馬宛書簡)

5・15(水)

直哉は午前から武者小路実篤を訪問。「美学」は休み、池之端を廻る。稲・プリンクリーから写真が来る。(日記)『木賃宿』落想。(手帳7)補⑤P170)

5・16(木)

直哉は、望月という家で写真を撮影。(日記)かねて落想の『面』『大小小紋』『木賃宿』について手帳に記す。(手帳7)補⑤P166～170)

5・18(土)

直哉は細川護立の家に行つて写真を撮つて貰う。(日記)〔筑摩書房『日本文学アルバム』志賀直哉』掲載・写真『友待つ間』執筆。青山の黒木三次を訪ね、留守だった為、向うの原で時間を潰す間に書いたものか? 《今の小説家のやる写生》にも挑戦している。(未定稿30)

この頃

直哉は、手帳に《○三十六年十月三十一日(新富座にてお伽芝居を見る)／三十九年五月五日(商業学校で英語会を見る)》と記す。稲・プリンクリーとの出会いの記録である。(手帳7)補⑤P171)

直哉は、作品名を手帳に記す。『嶋吉』(↓未定稿8の作品名メモ)、『仙太』(↓未定稿8の作品名メモ)、『長生』(↓未定稿

15? M 39・3・3、13年譜参照)、『悪魔の凱歌』(↓未定稿19)、『きざ子真三 姦淫』(↓未定稿22)、『お為と由夫』(↓未定稿28)、『甚吉』(↓未定稿27)、『盲人』(↓M 40・4・6年譜参照)、『追魔』(↓未定稿7)、『死猿』(↓未定稿9)、『比羅絵師』(↓M 37・8・7年譜参照)、『雪雄』(↓未定稿3)、『月代』(↓未定稿29?)、『花チャン』(↓『菜の花と小娘』草稿)、『老杉』、『バラダイス』、『悪魔の誘惑』(↓未定稿8の作品名メモ、M 39・11頃年譜参照)、『人身御供(お萬工夫)』(↓未定稿16の作品名メモ『人身御供』、未定稿10、11、65、66)、『犠牲 鶏の声』(↓未定稿16の作品名メモ『犠牲』、未定稿26『鶏の声』)、『愛子と徳田』(↓未定稿25)、『礦毒事件(社会劇)』、『鬼怒川堤』、『水車 鳥の声』(↓未定稿23、24、後の未定稿39)、『大小小紋』(↓未定稿16の作品名メモ、M 40・4・20、5・16年譜参照)、『ダイナマイト』(↓後の未定稿43)、『脱營』(M 37・9・17、19、M 38・11・27、M 39・4、11頃年譜参照)、『お竹と利次郎』(↓未定稿14)、『理性と恋』、『醜婦』(↓M 39・4頃年譜参照)、『木賃宿』(↓M 40・5・15、16年譜参照)、『面』(↓M 40・5・14、16年譜参照)、『女教師』。(『手帳7』補⑤P 172)

直哉は、手帳に《○写真送らねばならぬ人》として十二人の名前を記す。中に《10プリンクリー》とある。(『手帳7』補⑤P 172)

5・19(日)

直哉は内村鑑三の所に行く。帰り、木下利玄の家で、第二回文学読合せ会を開催。直哉・木下利玄は作品を持って行かず、武者小路実篤・正親町公和の作は廻して読む事にして、朗読会をする。直哉は泉鏡花の『湯女の魂』を朗読。夕食後、夜まで話して辞去。(日記)(木下利玄日記)

5・20(月)

直哉は武者小路実篤の小説を読む。武者小路実篤が志賀家に来宅。(日記)

5・21(火)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。リヨン二十二日の消印、東京六月十二日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

5・22(水)

直哉は午後、武者小路実篤とゴリーキーを少し読む。『美学』に出て、広市場に行く。昇之助の『壺坂靈験記』、東菊の『本朝廿四孝』四段目(十種香)、素止を聞く。(日記)

5・23(木) 直哉は、「言語学」に出る。(日記)

木下利玄が直哉に絵葉書を書く。長く里杲という号を使っていたが、今後小青という号を主に使うつもりとのこと。
〔志賀直哉宛書簡〕

5・24(金) 直哉は大学までノートを出しに行き、正親町公和を訪問して共に帰宅。細川護立より写真と手紙が来る。(日記)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。フォンテーヌブロー二十四日の消印、麻布六月十六日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕
細川護立が直哉に絵葉書を書く。写真を撮った礼の「即興詩人」を受け取るとのこと。〔志賀直哉宛書簡集〕
有島生馬が直哉に絵葉書を書く。フォンテーヌブローの消印、麻布六月十六日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕

5・25(土) 直哉は志賀英子・直三を連れて東京勸業博覧会に行く。(日記)

5・26(日) 午前、直哉は内村鑑三の所に行き、「マルコ伝」第十五章のキリストの死に関して、王だと我を張った良心について聞く。夜、武者小路実篤が志賀家に来宅、愉快に話す。武者小路実篤は、世のあらゆる悪は、人間が人間の価値を認めないために起こるといふ真理を発見したと喜んでいた。稲・プリンクリーへ手紙。田中平一より手紙と芝居「The Theatre」、『天津順吉』第二十四と写真が来る。(日記)〔手帳7〕補⑤P174～176〔内村鑑三先生の憶ひ出〕
有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ二十七日の消印、麻布六月十六日の消印。〔志賀直哉宛書簡集〕

5・27(月) 直哉は、夜、米津政賢と金沢亭に義太夫を聞きに行く。細川護立より写真と葉書が来る。(日記)

《汝は偽善者である》と手帳に記す。〔手帳7〕補⑤P175〔草稿〕第三篇〔九〕
武者小路実篤が直哉に葉書を書く。火曜日(水曜日?)の会は、今後武者小路の家でやってくれないか、昨夜は面白かった、など。〔武者小路実篤全集〕〔志賀直哉宛書簡〕

5・28(火) 稲・プリンクリーから、あんまり度々なのでよそうかと思っただが、昨日帰って来たのでと直哉に電話がかかる。(日記)〔手帳7〕補⑤P176～177〔天津順吉〕第二十三〔草稿〕第三篇〔九〕

5・29(水) 有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布六月二十四日の消印。関安子のことなど。(『志賀直哉宛書簡集』)
午前、半杭直人が志賀家に来宅。午後、直哉は武者小路実篤の家に行つて一人登校。稲・プリンクリーへ手紙。(日記)

直哉は手帳に、稲・プリンクリーは、自分のことをどう思っているのだろうと書き、武者小路実篤の家からの帰りに見た電車の中の労働者のスケッチを書く(↓後の未定稿31『満足』)。(『手帳7』補⑤P176~178)

5末 十四日会の同人で、雑誌を作ろうという声が起る。(『ノート5』補⑥P212)

6・1(土) 木下利玄が直哉に絵葉書を書き、上田敏の授業は今日で終了になった、君は小青という名は嫌だ、写生文は駄目だ、

虚子は器が小さくて駄目だと言うが、自分は好いと思うと書き送る。(『志賀直哉宛書簡』)

*座談会『回顧』では、直哉は「ホトトギス」の写生文は好きだったし、影響を受けているかも知れないと語っている。

6・2(日) 直哉は内村鑑三の所に行き、「ルカ伝」第十章第三十八節からの話を聞く。午後、志賀留女と鎌倉の志賀直方の新居

に行き、一泊。(日記)(『手帳7』補⑤P180~181)

6・3(月) 直哉ら、午後に鎌倉から帰宅。(日記)

6・4(火) 武者小路実篤が学習院で『人間の価値』(↓後『荒野』所収。メーテルリンク『智慧と運命』についても言及。)という演説

をし、直哉も聞く。(M40・6・8有島生馬宛書簡)

6・5(水) 午後、直哉は久保町に買い物に行き、武者小路実篤の家に行く。大塚保治の「美学」が休講だった為、木下利玄・正

親町公和・川村孜と西片町の夏目漱石を訪問し、聴講簿に修了署名を貰う。夏目漱石の子供たちを見かける。木下利玄と帰宅の途中、演伎座で時蔵の「義士銘々伝」弥作鎌腹の段を見る。木下利玄は志賀家で暫く話す。(日記)(木下利

玄日記)(M40・6・8有島生馬宛書簡)(『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

6・6(木) 夜、武者小路実篤が志賀家に来宅、十二時過ぎまで直哉と話す。(日記)

有島生馬が直哉にロダン作シャヴァンヌ像の絵葉書を書く。パリの消印、麻布二十五日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)
有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリの消印、麻布七月三日の消印。(『志賀直哉宛書簡集』)

6・7(金) 午後、里見弴、夜に柳宗悦が、志賀家に来宅、十二時過ぎまで直哉と話す。稲・プリンクリーから電話。(日記)

木下利玄が直哉に葉書を書く。「心理学」の試験は十八日の午後三時半からある、講義は来週中だ、「美学」の修了を望む人は八日の午前中にノートと帳面を事務室に出せとのことだ、など。(『志賀直哉宛書簡集』)

*「手帳11」の写真を巡る会話は、この日の稲・プリンクリーとの電話か? (『手帳11』補⑤P321~322)

6・8(土) 午後、直哉は丸善に行き、服部他之助を訪問。稲・プリンクリーから写真。(日記)

直哉は、有島生馬に手紙を送る。(M40・6・8有島生馬宛書簡)

6・9(日) 午前、直哉は内村鑑三の所に行き、「マルコ伝」第一章の話を書く。午後は常磐木倶楽部の落語研究会に行くが面白

くなかった。木下利玄が志賀家に来宅。稲・プリンクリーへ葉書を書く。(日記) (『手帳7』補⑤P183~185)

6・11(火) 直哉は「心理学」の勉強をする。午後、黒木三次が志賀家に来宅、夜、一緒に柳宗悦を訪問。(日記)

木下利玄が直哉に『青風が栗の梢に吹く革命の嵐が心にあれる』との手紙を書く。木下利玄が直哉に「こゝろの華」に載せる『お京』の評を書いて欲しいと依頼。(木下利玄日記)

6・12(水) 午前、直哉は芳賀矢一の「文学概論」の修了署名を貰い、大塚保治の「美学」のノートを提出。午後、東京勸業博覧会を見、青木嵩山堂で漢詩の本を買って帰る。夜、「心理学」を勉強。(日記)

6・13(木) 直哉は「心理学」の勉強。(日記)

直哉は、女が非常にいじめられて仕舞いに殆ど無意識に男を殺し、血を見て自分が怪我をしたのかと正気に返るが殺したことは知らず、そのうちに記憶が甦り、ハッと思う拍子に気が違うという、夢で見た大塚楠緒子の芝居を手帳に

メモする。(「手帳7」補⑤P186)

直哉は、異性・肉慾・生殖という問題を考えると下等な考えを頭に浮かべるが、無心に単純に子供のようには快活に毒のない人間にならなくてはいけないと手帳に記す。(「手帳7」補⑤P186)

有島生馬が直哉に絵葉書を書く。パリ十四日の消印、麻布七月七日の消印。(「志賀直哉宛書簡集」)

6・14(金) 午前、直哉は木下利玄の所に行く。午後、志賀直方が志賀家に来宅。夜、正親町公和が来宅。正親町公和は大学をやめようかと思うという。(日記)

武者小路実篤が直哉に葉書を書く。「心理学」のこと、ヒルテイのことなど。(「武者小路実篤全集」)

6・15(土) 直哉は下痢。(日記)

木下利玄が直哉に貸したノート二冊を預った正親町公和が、木下利玄を訪問。(木下利玄日記)

6・16(日) 直哉は下痢で中井常次郎の診察を受ける。腸カタルとのこと。午後、武者小路実篤が志賀家に来宅。(日記)

6・17(月) 直哉は「心理学」の勉強。(日記)

6・18(火) 午後、直哉は「心理学」の試験を受ける。問題を見てから、出来ないもので、『車掌』という短篇を書く(↓後の未定稿31「満足」)。帰途、明治座で観劇。「嫁おどし谷」「操三番」を見る。右団次など。(日記)(『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

*直哉は授業に出ていなかったたので、元良勇次郎の『心理学十回講義』(富山房)を読んでいったが、無関係な問題が出た。(座談会『志賀直哉日記をめぐって』)

6・19(水) 午前から田村寛貞が志賀家に来宅。夕方、黒木三次も来て、夜三人で柳宗悦の家に行く。直哉は『お京』の評を書く

(↓木下利玄「お京」をよむ)。(日記)

6・20(木) 午後、直哉は黒木三次、細川護立、木下利玄と歌舞伎座で観劇。「十二時會稽會我」「本朝廿四孝」「梅雨小袖昔八丈」

「新曲胡蝶」「五ツ獅子」を見る。芝翫・松助など。(日記)(『続々歌舞伎年代記』坤の巻)

6・21(金) 直哉は体調が悪い。(日記)

6・22(土) 直哉は午前中は衰弱。夜、武者小路実篤と木下利玄が来て愉快に話す。(日記)

6・23(日) 直哉は午前、内村鑑三の所に行き、「マルコ伝」第一章十二節からの話を聞く。午後、志賀直方が志賀家に来宅。(日記) (手帳7) 補⑤ P187~189

6・24(月) 直哉は、『琴平前』という短篇を書く(↓後の未定稿31『満足』)。ヘレン・ケラーの『わが生涯』を読む。(日記)

6・25(火) 正親町公和が直哉に、病氣見舞いの絵葉書を書く。(志賀直哉宛書簡)

6・25(火) バリの有島生馬が直哉に絵葉書を書く。(志賀直哉宛書簡)

木下利玄が直哉に絵葉書を書く。二十三日に久し振りに昇之助の「近頃河原達引」堀川の段を聞き、大変うまいと思つた、など。(志賀直哉宛書簡)

6・27(木) 武者小路実篤が直哉に、見舞いの葉書を書く。明日は徴兵検査だ、など。(武者小路実篤全集)(志賀直哉宛書簡)

6・28(金) 直哉は、『満足』の第三回書き直しをする。夕方、黒木三次と電話して不快になる、彼は真理を恐れるように思う。

夜、武者小路実篤を訪問。正親町公和もいる。(日記)

6・29(土) 直哉は『満足』を脱稿。(未定稿31)

午前、黒木三次が誤解を解こうと志賀家に来宅。有島武郎が来宅。直哉は、関安子の事を色々聞く。午後、正親町公和家にて十四日会。昼は雑談、夜に、正親町公和『寂しき己が家』、武者小路実篤『彼』、木下利玄『万霊塔』、志賀直哉『満足』を読む。直哉は『彼』(↓後『荒野』所収)が最もよいと思う。(木下利玄日記)(日記)(武者小路実篤『或る男』百五)

6・30(日) 直哉は、内村鑑三の所に行き、「マルコ伝」第一章二十一節からの話を聞く。午後、正親町公和『寂しき己が家』を読む。夜、柳宗悦が来る。田中平一より芝居(『The Theatre』、『天津順吉』)と文学が届く。(日記)(手帳7) 補⑤ P193~

195)

夜十二時半、直哉は、真理を恐れるようになれば救われざる墮落の第一歩である、彼は実業家になろうとしているから、その仕事の下らなさに目をつぶろうとするのだ、それでいて真理に反対する勇気もないので新渡戸稲造の所に喜んで行くのだと、黒木三次について手帳に記す。（『手帳7』補⑤ P 195～196）（『天津順吉』第一―三）

この頃

有島武郎が費用を出して関安子を女学校に入学させたか？（『蝕まれた友情』二）